

第一章 一言で言えば癒着かあ

田中があることに気付く。

「人間は社会的動物だから、どうしても関わり合いが必要になる。アリや蜂のように社会を形成する動物もいるけれど人間の関わり合いが一番複雑。関わり合いが行き過ぎるから癒着が生まれるのかなあ」

「なるほど！ どうやら癒着は関わり合いの深さに比例するようじゃ」

「この癒着が得意なのは政治家ですね」

「なるほど！」

大家が「なるほど」を連発するが、意外と田中は冷静だ。

「でも癒着するには相手が必要。政治家？ 議員？ 公務員？」

「行政サービスを行うのは公務員じゃが、サービスの内容を決めるのは議会じゃ。その議会の最大グループの与党から公務員を統率する議員が様々な行政省庁の親分、つまり大臣に就任するから有力議員が政治家と言うことになるのう」

「でも政治と行政は同じ？ 違うとすればどこが違うのか。よく分からないなあ」

ここでテレビのスイッチが入って山本の解説が始まる。

議員は「こうして国民を幸せにする」と言い、国民は「こうして欲しい」と言って議員を選ぶ。もちろんすべての政策を白紙委任したわけではないが、当選した議員が与党に所属していれば選挙公約を適当にねじ曲げて都合のいい政策（法律）を作って多数決で確定させる。しかし、行政機関のいわゆるキャリア公務員である官僚の助けがないと法律案を作れない。つまり現実的には立法府と呼ばれるが国会に限界がある。この曖昧さが境目をぼかしている原因のひとつだ。

野党の反対などで法律が成立しない場合もあるが、このように国会と行政機関は強い関わり合いを持っている。

それは人間の身体でいうと気管支と食道に似ている。このふたつは喉で分離する。折角、鼻

と口があるから空気は鼻から気管支へ、食べ物は口から食道へというルートが完全に分離していればいいのに、残念ながら人の身体はそこまで進化していない。空気が食道に入っても最後はおならで事なきを得るが、食べ物気管支に入るとやっかいだ。体力があれば咳き込みながらも吐き出すことができるが、幼児や老人は死に至ることもある。

同じことが国会と行政にも言える。国民の要望で政策を作って行政機関がその政策をキチンと実行しているか監視すべきなのに、政策実行する行政機関の最高責任者の総理大臣や各省の大臣に就任するとなぜか監視力が甘くなる。選挙で選ばれたはずの国会議員でもある大臣が国民感情を逆なでる発言をするのは立法院と行政の未分化によるものだ。行政機関が行政サービスを忘れるのは結局立法院と行政のこのような関わり合いがあるからだ。

「なるほど」

「議院内閣制というのは民主主義としては未熟なのじゃ」

「民主主義、民主主義と声高々に政府や知識人が言うけれど、欠陥が多いなあ」

「そのとおりです。今までの制度の中で一番ましな制度ですが、進化させなければなりません。進化するどころか退化しています。何とか気管支と食道を完全に分離すべきなのです」

「未分化だから国民が咳き込むんだ」

「なるほど」

「この関わり合いの強弱が公平であるはずの行政サービスをねじ曲げます。例えば大蔵大臣室

を筆頭には税務署長室に出入りできる者は限られています。それは関わり合いに強弱があるからです。税理士でも署長に面会するのは簡単なことではありません。ましてや関わり合いの弱い納税者は税務署の相談窓口ですら関門なのです」

「だから、最近『税務相談は気軽に最寄りの税務署で』と言わなくなったのじゃ」

「なるほど」

「納税相談は税務署ではなく相談会場で」と追い払われる。個人の確定申告時期は寒い冬だ。申告期限は三月十五日に固定されていて、会社のように申告期限を選択できない。個人も申告期限を選択できるようにすれば確定申告の混乱を解消できるがそうはしない。個人と言ってもそれなりの規模で事業を行っている者もいる。会社と言っても貧相な事業を行っている会社もある。申告期限を選択できれば一番忙しい時期を避けてじっくりと申告書を作成して申告したいというのが人情だ。現行の制度では税理士は十二月から三月までは死ぬほど忙しい。しかも税務調査があれば立ち会いもしなければならない。さらに税務署は納税相談の協力を求めている。税理士を監督するのは国税庁だから拒否できない。しかし、税務署と関わり合いが強い税理士はこの危機を避けることができる。さらに調査の立ち会いに応じる税理士からの要望を受けて融通を利かせることもできる。関わり合いの強弱は税理士という資格商売でも顕著だ。

関わり合い。それは言葉を換えて言えば「顔が利く」、つまり癒着があるからだ。行政だか

ら円滑に諸手続を終了させることは大事だが、このような関わり合いは円滑にと言うよりは行政サービスの差別的取り扱いになるし、最終的にはそのような行政機関への不信、そして行政機関の最高責任者である大臣、つまり議員、国会へ不信に繋がる。その積み重ねが何十年も続けば政治不信という悪しき慣習が生まれる。

絶えず最高の行政サービスを目指す努力をしなければならぬ。それは民間企業より厳しいと肝に銘じなければならぬ。以前は行政機関の窓口対応が横柄だと言われてきたが、国民からの批判に耐えかねて豹変したようにサービス内容をもっと改善する必要がある。マイナンバー法やテロ防止国民管理法で国民の懐や意思を透明化しようとする前に行政機関自体が透明化する必要がある。文書の自動消去などもつてのほかだ。

「やっぱり癒着が問題なのか。山本さんと癒着したいなあ」

そのときテレビの中から鉄拳が田中を襲う。

癒着はいつ生まれたのか。人間は社会的動物だから関わり合いを避けることはできない。関わり合いの強弱から癒着が生まれるから、社会が形成されたときに癒着が生まれたことは明らかだ。いや癒着が社会を誕生させたのかも知れない。いずれにしても癒着が必然的に発生することだけは確かなのだ。

問題は癒着が権力や権限、それに財産の集中をもたらし弱者を切り捨てる点にある。癒着が

白日の下で行われるのなら癒着自体は蒸発するが、癒着は夜行性なのでやっかいだ。行政が癒着に歪められるといざというとき、つまり戦争や大災害などが起きると対応が遅れてしまう。危機に対応すべき訓練が癒着によっていい加減になっているからだ。

もつとも危機というもの、いわゆる危機管理そのものに対応しようとするのは不可能ではあるが。危機という例外的な状況に対応すべき体制は曲がりなりにも安定的な秩序社会において形成されるものではないから。

だから政府はいつも「安全だ。大丈夫だ」と同じことを言うし、大災害が起こればやはり同じ言葉を連発する。

「このようにな結果になり非常に残念です。二度と同じことが起こらないように今回の事案を徹底的に分析して対処方法を構築したい」

しかし、同じことが繰り返される。しかも永遠に。

「不信心を持つなど言われたって無理じゃ」

「昔のことはよく分かりませんが、戦争に負けた後、日本は良く立ち直りましてね。でもそのとき戦争を起こした政府を信用する人は皆無だったのでは？」

「もちろんじゃ」

「誰を信用して復興したのか不思議です」

「まず戦争指導者がいなくなったのじゃ」

「それじゃ誰がこの国を引っ張ったのですか？」

いつの間にか機嫌が戻った山本がテレビに現れる。

「癒着グループは姿を消して日本の復興を担ったのは高等教育を受けられなかった低学歴の若い公務員や民間人だったの。瓦礫化した日本をしっかりと見つめて的確に対応して復興させました。結果として若い官僚が復興の手柄を手にしました。民間ではその後世界で認められる企業が排出しました。でもけなげに復興に携わったほとんどの公務員は出世しなかったどころか、平均寿命が短い時代でしたから、今から考えられない歳で退職しました。一方手柄を手にした官僚が高級官僚化して再び癒着政治の土台を作りました」

「よく知っておるのう」

大家が感心して山本を見つめながら続ける。

「それだけならいいのじゃが、一般の公務員も高級官僚の真似をしたらから世の中癒着だらけになったのじゃ」

「汚職ですね」

田中の言葉に大家は「なるほど」と反応せず応じる。

「癒着は濃厚接触で生まれるのじゃ」

「三密ですか」

「政官財……このみつつが濃厚接触すると癒着が生まれる」

「PCR検査しても陽性にはならない」

大家が頷いてから話の方向を変える。

「ゴーツー・トラベルという経済振興キャンペーンを知っておるか？」

「もちろん。でも僕みたいな貧乏人には関係ないなあ」

「そのとおりじゃ」

田中が少し憤りを表情に現す。

「あっさり肯定されたんじゃ……まあいいか。ところで新型コロナウイルスの感染が収まっていないこの時期に、しかも失業者が増加しているのに旅行できるのは金持ちで、かつ時間が自由に使える人なんでしょうね？」

「このキャンペーンの割引制度で高いホテルから予約が埋まっているらしいのじゃ」

「金持ちは一泊一〇万円のホテルが三割引の七万円で利用できるのなら……」

「田中さん。金額が低すぎる。金持ちはもつと高い……一泊百万円の……」

「高い話はいいです。低い話をしましょう。計算するのもやかいですから。僕なんか一泊五千円のホテルでも高い。割引で三五〇〇円になっても、割引なしで一泊二〇〇〇円のホテルで十分です。でもそんなホテルがあっても旅行なんかとても……」

「先ほどの例で言う高いホテルはコロナ感染が広がる前は一泊七万円じゃった」

「えーっ。それじゃ三万円値上げしたんですか」

「そうじゃ。本当は一泊七万円だから割引後は四万九千円じゃ」

「あくどい！」

「一〇万円の方が客は有りがたがる。三万円も負けてもらったと思うのじゃ」

「本当は二万円以上損しているのに」

「ホテル側は割引制度に関係なく七万円ではなく一〇万円入ってくる」

「政府はそんなこと知らないのでは？」

「いや、気付いているはずじゃ。この割引制度は高級ホテルに恩恵をもたらす」

「そうでしょうね。お金持ちはものすごく割引して貰っているように錯覚しますね」

「金持ちから高級ホテルに資金が流れるだけじゃ」

「でもホテルの従業員は首にならず助かる」

「低価格ホテルやその従業員はこの恩恵には与れないし、貧乏人も旅行には行けない」

「要は弱者は切捨てキャンペーンか」

「そう言えないからゴーツー・キャンペーンと言うキャッチフレーズにしたのじゃ」

「そればかりじゃない。割引の原資は税金……」

ここで田中の言葉から勢いが消える。

「でもたくさん税金を払っているから金持ちは特典を享受できるんだ」

「弱者に還流しなければ税金の意味がないぞ。わしが払った税金がこんな形で使われるのは心

外じゃ」

ここで山本が少し首を横に振りながら会話に入る。

「旅行会社やホテルや土産物屋も弱者です。その業界を助けようと税金を投入しているのです」

田中が少し憤りを感じて反論する。

「でもほんの少し前までインバウンドでポロ儲けしていたじゃないか」

「それは否定しません。私が言いたいののはさんざん儲けていたのに異常事態にあえなくダウンしかけていると言うことです」

「どうということじゃな？」

大家が山本の真意を促す。

「危機管理は政府といえどもできません。もちろん民間もです。でも地震や台風被害を見てもよく分かるように自然は時として人類に生き様の変更を求めるものです。変に弱者を……」

田中も大家もじつとテレビの中の山本を見つめる。

「……ここで言う弱者は事業を営んでいて危機に直面している人のこと、事業者のことです。

言い方が乱暴かも知れませんが事業を持続化できない業者、事業の変更をできない業者は潰れても仕方ないのです。いつまでも救済し続けるとゾンビ企業が蔓延ってしまつて逆に経済に悪影響を与えてしまうのです」

山本の強い口調に二人とも何も言えなくなる。

「今回場合、どうやら首相や取り巻きの大臣などが癒着している業界なのかも知れません。他の救済策と違って救済スピードが速いのです。しかも新型コロナウイルスの感染の第二波、第三波が押し寄せても、何をやってもスピード感を伴わない政府にしてはこのキャンペーンのスピードは落ちません。暴走に近い感じがします」

「首相は逆に弱者切り捨ての準備をしているのかもしれないぞ」

「大家さん、どういうことですか？」

「一応救済するが、予算委も限度はある。真に経営力のある業者だけが残ればいいと考えておるのじゃ。そうすれば癒着の疑いも消えるのじゃ」

大家は「なるほど」という声を期待する。しかし、田中はまったく別の言葉を出す。

「自然というものは人類には癒着しないんだ」

逆に大家と山本が「なるほど」と声にする。

第一章 一言で言えば癒着かあ